

提案しておきたいと思う。

究極の遊び。それは実に簡単で、みんな遊ぶ、ことである。一人遊びも時にはよいが、ずっとそれだとつまらない。一節で言った「批評言語の貧しさ」も、議論を重ねるうちに高まるだろう。ビジュアルPOEMに関して討議する場所がないならば作ればよいではないか。

僕は、ヴィジュアルPOEMを遊ぶ究極の方法は、それをもう少し丁寧に扱う事だと単純に思う。「東京ガガ」が話題にならないのは絶対におかしい。阿賀狼「ラッキーミーハー」ももっと打って出たはずだ。ちぎけんいち「アニマル アニマル」がなぜ知られていないの？ などなど。本稿を書き始めた頃、ふらり書店に入れば、藤富保男「客と規約」という奇体な詩集があり、急ぎ買い求めた。関口涼子「発光性 diapositive」という語の配列に命を懸けたようなのも買った。装本のレヴェルまで話を広げれば、竹内浩三「愚の旗」という書物（成星出版、一九九八年八月刊）は写真の色や使い方がとても上品だ。川端隆之の重いアレが新装になったね、前の買ったのに、とか。そんなふうにビジュアルPOEMというジャンルを豊かに話す場が欲しい。それが『死刑宣告』への一番の供養だ、なんていうつもりもないが、世の中そんなもんだ。ビジュアルPOEMが何よりすばらしい、と言っているのではなく、フツの詩作品の投稿欄があるのだから、ビジュアルPOEMの投稿欄みたいなものもあっていいと思うだけだ。そういえば、『死刑宣告』の時代には前衛だったビジュアルPOEMも、たとえばイラストポエムであれば、今や、女子中学生／高校生の専売特許。彼らに詩人が勝てるかな？

というわけで、「ヴィジュアルPOEMを遊ぶ方法」は、次

方法詩論

中ザワヒデキ

Hideki Nakazawa

たとえば私には、二十世紀初頭のダダの芸術家たちによる制作の放棄と、未来派の詩人たちによる意味からの離脱と、新ウイン楽派の音楽家たちによる調性の無視は、まったく別々の事態とはどうしても思えないのである。同じ原理が、ほぼ同時期の美術と詩と音楽に作用したとしか思えない。しかも、それらは互いに他の分野に横目遣いすることなく、自分野を正視し突き詰めたあげくの放棄、離脱、無視だったはずだ。ついでに言うとう、同じことは数学や哲学などでも起こっていたし、また、他の時代でもいつでも諸学諸芸を貫く原理は存在すると考える。歴史法則主義に対する批判はもっともだと思いが、それでもやはり、単一の諸学諸芸史というものが書かれるのではないか。

それはともかく、冒頭に挙げた諸事態は、還元主義という一語でまとめることができる。ところがここに、先人たちがやり残してきた空白が存在しているように思う。

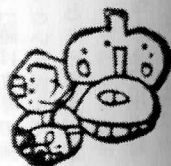
回より連載予定の「ビジュアルPOEMを探して」にまだ残みながら、継続審議、ということになる。もっともそこでは大正時代の『死刑宣告』の解釈なんぞではなく、びちびちとれたビジュアルPOEM投稿作品が紹介されるであろう。こぞってご投稿を。詳しくは別項《募集要綱》をご覧ください。過去にも現在にも色んな試みは沢山出てるが、まだまだ新しい発明だつてあるかも。ともかくそれを見ただけでハッピーになれる、そんなビジュアルPOEMと出会いたい。

《募集要綱》

- 1 ビジュアルPOEM作品を募集します。ビジュアルPOEMとは、視覚的要素に心を配った作品のことで、それ以外決まった定義はここでは致しません。ハガキにふらっと書いたイラストポエムでもいいし、写真に言葉を添えたもの、勿論もっと実験的な作品でもかまいません。但し、誌上で紹介できるものに限り、ます。
 - 2 応募された作品の中から優れたものを次号より連載予定の「ビジュアルPOEMを探して」のコーナーで随時紹介します。但し、初回のみ締め切りは七月末日（それ以降は毎月末日）で、紹介は九月号から始めます。
 - 3 毎号紹介した作品を中心に、その他の応募作品も加えたアンソロジー『ビジュアルPOEM大全』（仮称）を思潮社から刊行予定。時期は未定ですが二〇〇一年中にはと考えています。
 - 4 好評ですとアンソロジーを年鑑化する「秘密計画」もあります。こぞって投稿ください。
- 送り先その他——本誌編集部《ビジュアルPOEM係》と朱書。未発表作品に限る。ハガキでの応募も可。住所／氏名／電話番号を必ず明記すること。その他の条件は本誌新人作品投稿欄に準ず。

それは、還元主義がただちに形式還元つまりフォーリズムに結びつくとしてしまつたことに由来する。たしかにフォーリズムには説得力がある。内容を捨象して形式それ自体とした芸術が、さまざまな批判を浴びざるをえないほど、特権化されてもよいだろう。しかし、絵画を色彩平面に還元し、詩を文字列に還元し、音楽を振動時間に還元しただけでは、何が絵画を色彩平面に還元させ、何が詩を文字列に還元させ、何が音楽を振動時間に還元させたのかが語れない。そしてその「何」こそが、最初に述べた「同じ原理」のはずなのである。

その、「同じ原理」である「何」を何と呼んだらいいのか、フォーリズムとは別種の還元主義作品の発表を行いながらずと考えてきた。昨一九九九年、ある詩人との会話中に篠原資明の方法詩を知り、ならば、方法絵画、方法音楽もありうるのではないだろうかと考えた。諸芸を分かち形式還元ではなく、諸芸を統べる方法還元という言い回しがあつたとしてもおかし



くはない。内容を捨象して形式それ自体に化すのではなく、内容を捨象して方法それ自体に化すという言い回しも、十分可能なのではない。二〇〇〇年一月一日、「方法絵画、方法詩、方法音楽（方法主義宣言）」というマニフェストを、詩人松井茂、音楽家足立智美を起草立会人として発表した。

篠原の作品を、それ以前に知らなかったわけではない。どころか、文字を色彩の画素として扱う還元主義絵画を準備していた最中、篠原の『滝の書』に行き当たり、私がやりたかったことが詩の世界ですぐに実現されていることにショックを覚えたものだった。まだ習作段階だった私の『文字座標型絵画』に、より強固な方法の導入を迫られたできごとだったが、その当時は、方法詩という単語は目にしてきたかもしれないが、見落としていた。

こんないきさつだったから、篠原の言う「方法詩」と、私の唱える「方法詩」では、異同がある。「方法に服する」とする点では両者とも同じだが、篠原の場合、定型詩・偶成詩・方法詩の三種に大別される詩の一であるという立場で、還元主義という規定はない。それに対して私の場合、「方法詩は、私情と没入を禁じて方法自体と化した文字列である」と宣したように、内容の捨象が前提である。定型の否定も行ってはいない。それが、「篠原」氏の活動に敬意を表しつつ、同語を拡大・再解釈して用いる」と補遺したゆえんである。私は篠原の「方法」に精神的な親近感も抱いているが、以下は取りあえず、私の唱える方法詩論である。

詩のアイデンティティ

方法主義宣言では、前述の方法詩の定義に続けて、「ただし、

ら辺の感じ方は、個人差と時代差と恣意を若干件うため、読者諸氏と意見が合うかはわからない。あくまで現時点の私の判断で「詩は文字列である」と定義するのである。ちなみに改行による分かち書きは、それを伴わない俳句や散文詩を詩でないとは考えにくいことから、本稿では詩のアイデンティティとは考えないこととする。

さて、この定義にもう一度立ち返るとすると、詩は、文字を素材単位とし、列を作品形態とする芸術であるということになる。そして、より前者に重きを置く発想が、諸芸から詩を分かち形式主義で、より後者に重きを置く発想が、諸芸と詩を統べる方法主義だと図式化できる。

最良の形式主義の例は、ゴムリンガーが唱えた初期の具体詩だ。マラルメに由来する『星座』の譬えは、文字（語彙）を、列として意味化する前に星のように点在させようとしている。

第一番	855	1673	629
	494	0505	333
	681	2943	798
	018	8526	371
第二番	327	9999	723
	148	6666	841
	158	7777	851
	357	5555	753
第三番	087	2470	622
	372	1149	037
	541	8537	537
	200	7152	493
第四番	206	8007	174
	703	9335	185
	408	7338	195
	905	6007	177
第五番	358	1042	923
	762	4651	038
	485	9280	834
	864	1392	534

左中ザワヒデキ「数字詩（一または四話者のための十進数字朗読詩）」(右上)、「二一〇個の終声付ハングル垂線」と「二一〇個の終声付片仮名垂線」(左上)、松井茂「甲乙詩・一」(下)

抒情を叙事する実際の文字は、周到に他の記号に代替されることもある」と許可事項を加えている。つまり、定義文において詩を文字列と規定した上で、条件文においては素材を文字に限定しない可能性を示しているわけだ。

ここには詩のアイデンティティに関する問題が二つ含まれている。ひとつは形式的規定についてで、素材単位を文字と見なすかどうかの問題。もうひとつは方法的規定についてで、作品形態を列と見なすかどうかの問題。これらを検討する前に、前項では不問に付したまま論議を進めてしまった「詩は文字列である」という定義を吟味しておこう。

定義の吟味とは、許容範囲の画定作業でもある。アルファベットの濃淡でモナリザの画像を表現して「詩」だという人もいれば、一枚の写真を「詩」と宣する人もいる。比喩ならばともかく、混乱を増すそれらの謂いを防ぐには、詩は何らかの力によって画定されなければならない。たとえば、死に急ぐわれわれにとって、「これも詩である」という領域で遊んでいる暇はない。「これこそ詩である」と確信させるものだけを詩と呼ぶことにする。……というのではいかがだろうか。

私は、未来派に由来するオノマトペは「これこそ詩」だと思う。オノマトペを詩の範疇に入れるためには、「詩は文章の列である」とか「詩は単語（語彙）の列である」という規定ではこと足りない。「詩は文字の列である」というところまで、素材は分解されなければならない。反対に、アルファベットのモナリザを詩の範疇から駆逐するためには、「文字さえ使用されていれば詩である」という自由は容認すべきでない。「詩は一次元の列である」というところまで、形態は規定されなければならない。オノマトペを入れ、モナリザを排除するというこ

それに対して、行き過ぎた形式主義の例は、ガルニエらの空間主義詩である。具体詩から出発した空間主義詩は、文字への固執と引き替えに列を放棄し、空間上の自由な文字配置をあらわした試してしまった。結果的にそれは文字芸術とでも言うべきものとなり、「これこそ詩」とは確信しがたい。しかし、「詩」であることにさえこだわらなければ、実はそれは方法絵画である。行き過ぎた形式化は、形式を逸脱するという逆説だ。

最良の方法主義の例を逆算してみよう。それはきつと、ピーズのネットワークに譬えられるだろう。列中の文字は前後関係や配置の規則を頭わにし、ピースを連ねるアルゴリズムを具現することだろう。

それに対して、行き過ぎた方法主義の例は、文字を放棄した一次元列で世界に君臨することである。方法詩人にとって、列はすべて詩だ。文字ならぬ音符の列は単旋律音楽という方法詩

糸食丘斤竹艸心門口木食門
 己可虎戸寺何非才未每余呂
 紀飼虚所等荷悲閑味梅餘閭
 キケコソトノヒヘミメヨロ
 岐結孤祖都野飯幣彌賣夜路
 支吉瓜且者予反敵爾買亦各
 山糸子示邑里食巾長出夕足

△中ザワヒデキ「数字詩（一または四話者のための十進数字朗読詩）」(右上)、「二一〇個の終声付ハングル垂線」と「二一〇個の終声付片仮名垂線」(左上)、松井茂「甲乙詩・一」(下)

であり、文字ならぬ変曲点の列は単一曲線という方法詩であり、0と1のデジタルデータは仮想空間を構成する方法詩であり、DNAの塩基配列は生命を司る方法詩である。これらすべてを詩と呼ぶのはいささか奇異だろう。しかし、「詩」であることにさえこだわらなければ、実はそれは聴いたり見たりダウンロードしたり生まれたりできる。行き過ぎた方法化は、五官に訴えるという転倒だ。

そして「最良」と「行き過ぎ」のさじ加減は、条件文中の「周到」の語によって、各詩人の裁量下に置かれる。

方法詩作例

まず、方法の意識のもとに実際の文字を周到に他の記号に代替した作例は、現時点ではまだ制作されていない。先人の業績としては美術家の河原温による「色彩詩」と、松澤有による「記号詩」に一応触れておく。前者は色鉛筆による色彩の点を定型詩のように書き連ねた書物。後者は詩人として出発した松澤が北園克衛グループから離れて美術家に転身する時期の作で、地球人以外へも伝達するためにあえて宇宙共通の文字として記号が採用されたもの。ただし二次元配置で、列ではない。次に、通常の国語以外の文字記号を採用した作例ならば、私の「数字詩（一または四話者のための十進数字朗読詩）」と、「二一〇〇個の終声付ハングル垂線」と「二一〇〇個の終声付片仮名垂線」が挙げられる（共に一九九九）。前者は定型形式を採用しているが、方法的には不完全。0から9までの数字に宿る生理感覚の抽出をテーマとし、方法主義に違反する偶然や即興、没入、表情が使用されている。朗読は何語でもよいとされる。後者は、方法的には完全だが詩としては少々行き過ぎの、

れた色彩平面である。ただし、快楽に直結する実際の色彩は、周到に他の物質に置換されることもある。方法詩は、私情と没入を禁じて方法自体と化した文字列である。ただし、抒情を叙事する実際の文字は、周到に他の記号に代替されることもある。方法音楽は、表情と速度を禁じて方法自体が具現した振動時間である。ただし、愛欲を加減する実際の振動は、周到に他の事象で代用されることもある。これらの方法芸術は、一方ではそれぞれ形式が依拠する伝統に帰しつつ、他方では単一原理を同時代的に唱和する。われわれ方法主義者は、放縦と怠惰を学芸にもたらした自由と平等を懐疑し、倫理としての論理を復権する。補遺一／篠原資明は、十年ほど前から自作を方法詩と呼んでいる。氏の活動に敬意を表しつつ、同語を拡大・再解釈して用いる。補遺二／本宣言に対する賛同者は、「賛同 氏名（肩書）」と末尾に書き加えた上で、自己の責任によって、知人に転送して構わない。部分的賛同者、非賛同者も同様である。もちろん、氏名を追加せずに転送したければ、それでもよい。西暦二千年（平成十二年）一月一日／起草 中ザワヒデキ（美術家）／起草立会 松井茂（詩人）／起草立会 足立智美（音楽家）

*3 ちなみに私の「文字座標型絵画」や「行当り字数可変絵画」は、文字を色彩の画素として扱った方法絵画である。方法論的には空間主義詩と似たところもあるが、私の場合は動機において「これこそ絵画」を目指している。

*4 まだ詩作品化はしていないが、私の「七六八個の変曲点のある単一曲線」と「七六八個の裝飾音符付楽音のある単旋律」は、同じアルゴリズムを美術作品と音楽作品に具現したものである。単一曲線の視覚的印象と、単旋律の聴覚的印象は、同じアルゴリズムゆえ同じである（はずである）。また、表音文字である平仮名を音符として扱った私の方法音楽（二声、三声の五十音ポリフォニー）は、そのまま同時進行詩と呼びうるものである。

二国語二話者のための同時進行詩（でありかつ美術作品であり音楽作品である）。ハングルではパッチム（終声）と呼ばれる「子音+母音+子音」の組があり、七つの子音が使用可能である。代表的な六母音との組み合わせで、パッチムのしりとりとした（ハングルが読めなくても視覚的に確認できる）。日本語発音にパッチムはないが、片仮名二個から創作できる。日本語は五母音なので、七と六と五の公倍数二一〇で一巡する。最後に、文字は文字でも、抒情を叙事する以前に発音を宙づりにしてしまいう歴史を内包した例が、松井茂の「甲乙詩・一」（二〇〇〇）である。詩形式的にも方法的にも完全。視覚と聴覚、表意と表音、古代と現代、大陸と大和の見取り図である。「中央のカタカナが上代において甲類・乙類の仮名遣いを有している」。さらにその左右に各漢字の音符。その左右が意味。「甲類・乙類とは、上代には区別されていたが現代は区別されていない音の二形。

注

*1 還元主義という風にとめるならば、美術ではむしろ抽象画家たちによる対象の放棄を例として挙げた方が適切だろう。しかし従来芸術との断絶を強調するため冒頭ではダダを引き合いにした。また、大局的にはどちらも似たような事態でもある。

*2 方法絵画 方法詩、方法音楽（方法主義宣言）／二十世紀の諸学諸芸に民主主義体制の結果として林立した同語反復は、形式ではなく方法への還元によって、再び単一原理として語られ始めなければならない。同語反復が意味する無意味は感覚主義や衆愚の口実とはならず、むしろその権威化には禁欲と戒律が要請される。方法絵画は、偶然と即興を禁じて方法自体に重ね合わせる。

第15回国民文化祭・ひろしま2000「文芸祭」現代詩作品募集

■応募受付期間

平成12年4月1日(土)～6月30日(金) (当日消印有効)

■応募規定

- ①作品
未発表作品とし、一人1編とします。
- ②募集部門
ア 高校生・一般の部
イ 小・中学生の部
- ③応募料
一人につき1,000円(ただし、海外投稿者及び小・中・高校生は無料とします。)
- ④応募方法
所定の用紙による応募となりますので、募集要項をご請求ください。
また、インターネットによる応募もできます。
- ⑤応募先
ア 郵送等
第15回国民文化祭三原市実行委員会事務局
「文芸祭」現代詩係
〒723-8601 広島県三原市港町3-5-1
TEL0848-67-6157 FAX0848-67-5912

イ インターネット

E-mail bunkasai@hiroshima-cdas.or.jp

URL <http://www.hiroshima-cdas.or.jp/bunkasai2000/index.html>

■賞(予定)

文部大臣奨励賞 国民文化祭実行委員会会長賞
広島県知事賞ほか

■発表

- ①日時・会場
平成12年11月4日(土)10:00～15:00
三原リージョンプラザ(広島県三原市円一町2-1-1)
- ②作品集
入選作品は作品集として刊行し、高校生・一般の部は応募者全員に、小・中学生の部は入選者に無料配布します。

■募集要項請求先

第15回国民文化祭広島県実行委員会事務局
「文芸祭」現代詩係
〒730-8511 広島県広島市中区基町10-52
TEL082-228-2111(内線2848) FAX082-222-7133

■主催者

文化庁 広島県 広島県教育委員会 三原市ほか